少年たちは秘密結社を作る

“少年探偵団”に代表されるように、男の子というのは大人や女の子たちに隠れて秘密結社を作ることが好きなもの。単なる仲良しグループから、組織と呼べるものまで…。族、組、団、隊…。暴力団、軍隊、マフィア、新選組、組合、メンバーズ・クラブ、チーム、学界、文壇といった大人の社会の組織のヒナ型は、すでに少年時代の“ごっこ”の中に見られます。純粋であるがゆえに、どこに行くのかわからない危険をはらんで…。ところであなたは“ライチ・光クラブ”をご存知…!?



●作／K・TAGANE●補作・演出／飴屋法水●ポスター／丸尾末広

“ライチ・光クラブ”とは……チェスの名人で頭が切れるリーダーのゼラと、その親友でハーフの(?)ジャイボ、その他6人の学生服の少年達(中学生?)による秘密サークル。野原の地下にアジトを作り、ある目的のために活動している。その目的とは——ロボットの製造! 何のためのロボットか——少女捕獲のため! 少女を捕獲してどうするのか——それは……その秘密は、ジャイボが作った鉄のペニスに関係がある。光クラブのメンバーは、全員、彼の作った鉄のペニスを付けているのだ!

ライチとは何か——「表面は、こんなに醜い、赤黒い、堅い表皮で包まれているが…はら、こうして2つに割ると、美しい乳白色の実が出てくる」「あの楊貴妃もね、これを好んで食べたそうだ」(ゼラ)という、中国産の常緑樹の実。それが光クラブと何の関係があるのか——彼らが作っているロボットが、「僕らの可愛いマシンに、味もそっけもない電気やガソリンなんか食べさせられないじゃないか」というゼラの美意識によって、ライチを燃料とし、その名もライチと名付けられているのだ!……

ここでご紹介するのは、マンガ家の丸尾末広先生がポスターとゲスト出演したことで注目され、『マーキュロ』(小JUNE2月号に脚本収録)『帝都物語』の公演の成功で急速に人気の高まっている劇団“東京グランギニョル”の最新作『ライチ・光クラブ』のステージの模様です。

公演は12月20日から25日まで下北沢の東演パラータにて。連日立ち見の盛況で、当日で来た人は入れないという状態。その人気の秘密は何かというのは、とても一言でいえるものではありませんが……丸尾先生の作品に通じる耽美的でグロテスクでエロチックでノスタルジックな雰囲気、少年性へのこだわり、ユーモア、哀しさ…それらを支える脚本、装置、音響、美術、衣装、小道具の良さ、大胆かつ細心な演出、役者の個性(しかも、ほとんど全員ケガだらけというホンキの熱演!)といったものが、圧倒的なエネルギーとなって客席へ向って来るからでしょうか。

ライヴや舞台の感動というのは、文字と写真で伝えられるというものではありませんができるだけ(ややJUNE的部分にこだわりつつ)やってみます。JUNETOPIAの黒川あづささんのレポートもごらん下さい。

フォト／佐藤ジン



▼光クラブの本拠地は地下にあるため、潜望鏡が地上の偵察に役立つ。パンと手を叩くと、ブランと鉄の筒が弧を描いて降りて来るのがカッコイイ(頭にぶつかると当然ケガをするので、役者さんは命がけですが)。

こういう仕掛けというのは男の子が大好きなもので“秘密基地”ごっこには欠かせません。

この潜望鏡で光クラブの少年達は、リーダーのゼラが何かを拾い集めている(実はライチの実)のを見つけて不審に思います。





まぶたを切り取られるなんてイヤだろう？ そう。これは、光の洗礼なんだ！

たまたま近くを通りかかった鳥羽は、光クラブにつかまり、吊るされ、取り調べを受け、ゼラによって有罪の裁断を下され、強力なライト（お気に入りのロイヒテン）によって目をつぶされてしまう。何も見なかったということを証明しろと迫られて、鳥羽は定期検診で視力が0・01だったということを持ち出しましたが「君の論理で、見なかったと証明したいなら、0・01じゃダメだね。0・00でなければね!!」というゼラのサディスティックな言葉によって否定されるのでした。論理的な尋問には「アインス（第一に）」「ツバイス（第二に）」等ドイツ語が使われてます。鳥羽（浜里堅太郎）は女教師（萩尾なおみ）の出現によって助かりますが、この時の会話が「誰にこんなことされたの？」「誰にも…じ…自分で…」「自分でこんなことできるわけないでしょう！」「いえ…僕は、き、器用なものですから…（笑）」報復を恐れて真実を告げずに逃げ去る鳥羽。女教師も、再び姿を現した光クラブの連中にからかわれながら退場して行きます。







坊ちゃん…あなたには黒い星が出ている。

ゼラの来るのを待っていた少年達の前に現われたのは、ヘンタイ予言者（？）マルキド・マルオ（丸尾末広）。「不安と動揺を取り除くための唯一の秘薬」で、ヒトラー先生も毎日食べてたというチョコレットを少年達に食べさせようとしたり、死体解剖ビデオを見せつけているところへ、ゼラ（常川博行）登場。マルオはゼラに、「あなたには黒い星が出ている。ヒトラーにもなかった黒い星だ」と、額に見える「不吉な男につきまとう星」を指摘し「今にとんでもない目にあうぞ！」と予言。ゼラは彼を追い出し、少年達に、彼らのマシンを〃ライチ〃と名付けると宣言。



順番が前後しますが、ここでライチの説明。説明は、ライチの制御担当のデンタク（佐野頌域）のセリフで。

「えー、まず、マシンは、この電卓を使って制御できますが、自動にしておけば、マシン内部のコンピューターによっての制御となります。内部のコンピューターに新しい情報をインプットしたい時は、この電卓によって、それができます。えー、内部コンピューターは、かなり高度なものにしてみました。音声から意味を分析し、行動に移ることもできます」

ライチ誕生の直前に、ゼラが何を考えてか、この電卓を使い、ライチが「人間」であるとインプットしてしまったために、ゼラは自分自身と光クラブを滅ぼしてしまう結果になります。

ライチは、ドイツ表現主義映画『カリガリ博士』に出てくる眠り男のように棺オケ型のボックスから、その姿を現します。

外見は人間と同様、マントをはおったプロレスラーの感じです。オルガンを弾くこともできれば、眠っている少女マリンを花で埋めたりもします。ロボットというより、フランケンシュタインに近いと思われます。



そのユニークなマシン、ライチを存在感あるものにしているのは、東京グランギニョルの看板スターというべき島田久作さん。『マーキュロ』での潔癖症の保健教師（小説JUNE2月号参照）『帝都物語（ガラチア）』での、東京の気象をコントロールしようとするマッドサイエンティストの怪演と、その独特な顔の骨格によって、グランギニョル・ファンには、かけがえのない人。

メスをふりまわしての手術前の踊りや、拷問の舞いのダンスも印象的で、今回は狂ったライチのメカニック・ダンスが見られました。

ライチがオルガンで弾くのは、ロバート・ワイアットの名曲「アンバー・アンド・ジ・アンベリン」ですが、島田さんは、バンド「タイム・スリップ」のベーシストでもあるので、プレイは自然なのでした（『スタジオ・ヴォイス』2月号に写真が出てます）。

このオルガン演奏は感動的で、マリンでなくとも、思わず聞きほれてしまうのでした♡













鉄のペニス。これを、女の体に用いるとどうなるか？

ゼラの「無二の親友」ジャイボ（飴屋法水）は、逃げ出そうとしていた女教師をつかまえて地下に連れ戻し、いたぶったあげく、鉄のペニスで犯した殺してしまいます。全長250ミリ。重さ2・4キログラム。アーム部直径30ミリ。シリンダ・ストローク、170ミリ…ピン、プレート、ロッドはダイカスト合金…ヒンジはゴム、その他は全て鉄。鉄のペニスだ。――ゼラ君をはじめとして君たち光クラブの諸君につけてやったものも、これから君たちのマシンに使用されるものも、もちろん僕がつけてるものも、全て同じである――これは、女と寝るためのものではない。では何と寝るためのものか？…それは君達が自分で見つけたまえ」と言い、「そう、僕は例えばTVとでも寝てみよう。やあ、サイキックTVちゃん！こんにちは!!」と、ペニスをTVに突き立てマスターベイション。

さあ、目を開けるんだ！ 世界は光の支配下にあるんだ、ライチ!!

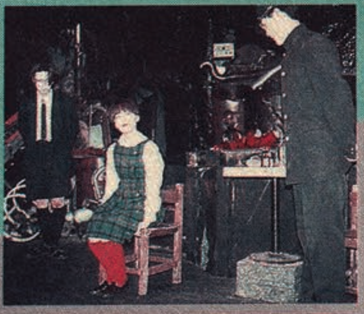
光クラブの頭脳の結晶、少女捕獲マシン、ライチは見事に動き出しました。

「この、猫の頭の内側に眠り薬がしみ込ませてあるのね。で、このマスクを被せると、とたんにスヤスヤ眠りこけてしまうんだけど、副作用はだいじょーぶ。マスクをはずせば、すぐに眠りからさめるわけ。ちょっと原始的かもしれないけど少女をつかまえるには、やっぱりこれが一番と、天才、雷蔵さまは思うのね」とオカマっぽい雷蔵（矢車剣之助）が作った猫の形をしたマスクをライチに持たせて少女をつかまえさせようとします。「…これで、わかったかしら。…わかった？」「一度言えば、わかる！」と頼もしくライチは答えて風のように外へ出て行きましたが、一度目は、マスクを自分の頭にかぶり、クマのヌイグルミを持ち帰るという（場内大爆笑）失態。しかし、2度目には、一人の美少女を掠って来たのでした。「…諸君、初めての客に、乾杯だ！」（ゼラ）――一幕終了。













もし……もし、私が機械になったら、キミは嬉しい？

ライチが捕えた最初の少女（越美晴）は、ゼラの質問に「変な名前」とか「そういういやらしい口のきき方はやめた方がいいわ。ここで出される食事と同じくらい悪趣味だわ」「もっとマシな質問ないの？」といった調子で、名前すら教えようとはしなかった。しかし、オルガンの練習をしていたライチと二人っきりになったのをきっかけに、ライチとだけは打ちとけて仲良くなり、自分の名前がマリンであると教える（梶図かずお先生の、機械と人間の愛のドラマ『私は真悟』のヒロインと同じ名前だ）。二人の会話が面白い。「私は人間だ。そうインプットされた」「インプットって、どこに？」「私の頭の中」「じゃあ、頭を割ってみせてよ」「……」「あら、すねたのね。わかったわ。信じてあげる。すねる機械なんて、おかしいものね」

ライチに嫌われたくないために機械になってしまってもいいと思い始めるマリン。「だって、おばあさんになどなったら、私、いろんなものから捨てられてしまうわ。キミだって、私に花をくれなくなるにきまってるわ！」

マリンとの交流で、人間として目覚め始めたライチは、ゼラに逆らい、狂い、暴れ、学生達の殺リクを始めた……。



それでいい…意志を持て…さあ僕をにせものの神にしてくれ!!

学生達を皆殺しにした後、ライチはゼラの内臓をえぐり出す。「……魚は…内臓をえぐり取られても、まだ泳ぎ続けるっていうけど…ほんとだな……これが…これが僕の内臓か……しかし…痛いもんだな……なんとか…もとに、もどせないかな…困ったな……少し……少し、疲れたよ……ちょっとだけ…休まなくちゃ…そうだ…ほんの少し…休もう…「ライチ、ラライチ、ラララライチ…」歌うようにつぶやきながら倒れ伏すゼラ。——正気に戻り、狂ったように今度はマリンを捜し始めたライチ。物陰から出てきたマリンに呼ばれ、喜んで駈け寄ろうとして…燃料が切れて崩折れてしまうライチ。マリンは泣き叫びながら、たった一粒残っていたライチの実をライチの閉じられてしまった唇に押しあてる。「ライチ!!食べて動いてよ！待って、いま、いま食べやすいように皮をむいてあげるわ…ほら、これでいいでしょ…さあ食べて、食べるのよ！」……





タミヤ君……そう、キミには、…去勢の刑なんてどうだろね？

「最初の一人を上回る少女は、現時点では、いない。だから必要のない少女は、もうこの辺で捨ててしまおうじゃないか」と、ライチに命じて、捕獲した少女達の首の骨を折って「仕末」させてしまうゼラ。ゼラにチェスであっさり負ける屈辱を味あわされていたタミヤ（武井龍秀）は、彼に対する不信感をつのらせていた。そこへ、ジャイボが「ゼラに勝ちたいんなら、他の手を使え、他の手をな」と、ナゼカたきつけた……タミヤは、ライチの燃料であり、ゼラが育てたライチ畑に放火するという行動に出たが、つかまってしまい、ゼラとジャイボの前に引き出された。自分がそそのかしたことを忘れたかのようにジャイボは冷たく去勢の刑を執行させる。「お前のような腰ぬけに鉄のペニスは似合わないのさ！」——ライチとマリンに逃げ道を教え、下半身を血まみれにして去って行くタミヤを、マリンがなぐさめた(？)「いい？…男と、女と、両方に成れて、得したかとか、そういう風に思うのよ！」それに対するタミヤの答「……バカヤロウ!!」ゼラは、最終計画を早め少女を改造して「鉄の少女」にすることを決定した。





飴屋法水



萩尾なおみ



丸尾末広



越　美晴

ちょっと生意気で可愛い少女マリンを好演したのは歌手の越美晴さん。テイチクより『ボーイ・ソプラノ』というLPが出てるだけあって、声も印象的でした。

毎回のポスター&ゲスト出演で丸尾先生とグランギニョルのイメージは一体化してしまい、マルンスエヒニョロになってしまった感じです。

『ピンクのカーテン』などで有名な女優の萩尾なおみさんの迫真の鉄ペニス挿入死シーンも見所でした。萩尾さんは少女マンガ・ファンでもあり『週刊宝石』などでエッセイも書いてます。

演出・音響・美術をこなし、舞台では狂気の人となるアメヤノリミズさんは若干24歳。多彩な才能とパワフルなエネルギーで、これからちょっと目を離せそうもありません。

★『ライチ・光クラブ』は3月に追加公演の予定。

★「グランギニョル」「光クラブ」は実在したものなので、興味のある人はフランス史、日本史を調べよう。

演劇感想文

捨て身の演技が客席を襲う!!

東京グランギニョル公演

ライチ・光クラブ

LITCHI・HIKARI CLUB

作・K. TAGANE
演出・飴屋法水



ときは 12月の25日。場所は下北沢の東演パラータにて東京グランギニョル第3回公演「ライチ・光クラブ」をみてきました。

外は寒かった！だけど すでに人が長い列をつくっていたのだったよ。

前売り券買ってないと劇場に入れない事があるのら。いつも満席 大盛況！



グランギニョルのお芝居はいつも細かいギャグが入ってて笑えるのですが全体的なストーリィはとてもシリアスさ。今回の「ライチ・光クラブ」も話はシリアスに進んでいきます。

タイトルの"ライチ"は中国料理なんか食べに行くと、たまに出される事あるけど、肌色(皮をむくとね)した なしのよーな ぶどうのよーな 桃のよーな不思議な歯ごたえのする果物の事さ。しかし ありは全く謎のよーな食いもんだな。わし好きだけどん。




これを かぶせると 少女は すやすや眠っちゃうのよー
天才・雷蔵様。
はっきり言って おちゃめである。
圧巻
ずっこん
ばっこん
少年(?)が サイキックTVと 愛しあうシーンなんて あるのよっ♡ へんたいねー♡
♪音楽は 細野晴臣の 「銀河鉄道の夜」から ピックアップして 使ってたみたいですね。
他にも色々と 割と暗めの曲 多かったです…。
細野さんの曲に あわせて踊る 越美晴さん
かわいーぜ。
♪～
演出を手がけている飴屋法水氏。 TVと愛しあっちゃったりしてるけど 本当はまともだったりするのさ。 なんちて
でか
でか
ヘッヘッヘッ みたまえ!!
いつも出演している 丸尾末広先生も 出とるよ。
人に死体解剖の ビデオを見せて喜ぶ 変態博士(ごめん) の役でした。でも ラブリーなんだじぇい。
とても一言で言えないおもしろさ!で 私は 感動!ですのよ♡ 毎回血しぶきあがる舞台で. 一番前の客席なんて 血のりが飛んでんじゃ ないでしょーかね? でもやはり
独特のエロチシズムと 役者さんの熱演!!(ほんとにすごい) これなくしてグランギニョルは 語れませんね♡♡
ゼラくん 怒っちゃったよー
♪ちゃん♪ ちゃん♪